

不登校“よい子”の発達現象を考える

— 今日的人間関係の病理 —

国松清子

A study on developmental phenomenon of non attendance at school of good persons

Kiyoko Kunimatsu

1、始めに

今日、青年期のある人たちに社会をにぎわせるような様々な現象が見られている。背景には時代の変化とともに、働き方の変化等、価値観や生き方にまで大きな変化が生じており、それらが影を落としているのは間違いない。そういった意味では、若い人たちだけの問題ではなく、私たち同じ時代を生きている皆の問題でもある、といえる。最近もあったような無差別殺人など衝動的な事件も、絶えず、というわけではないが、毎年のように新聞を賑やかす。一方では、家庭に引きこもり何をしているのかよくわからない生活をしている若い人たちがいて、こうした事件と無縁ではない様子がみられるのである。今回は、高校での不登校、引きこもりに焦点をあてて、現象そのものを探りながら、発達のな問題、病理にまで考察を試みようとするものである。

2、目的

今回は研究活動の一つとして継続しているスクールカウンセリングでの経験を取り上げて、その中でも高校での不登校に焦点を当てた。やはり、中学校での不登校が最も多く、要因も様々であるのはよく知られているところである。しかし、高校でも不登校は見過ごすことのできないくらいに生じていて、その解決が進路変更による転学であったり、退学であったり、と義務教育の中学校とは様子がずいぶん異なっている。

スクールカウンセリングでは中学校、高校において不登校生の親、時には生徒自身への相談、面接を実施することが多い。地域密着の中学校と違って、高校は学力によってすでに生徒の質が均一化されていて、不登校の要因の多様性は中学校程ではない。今回取り上げた高校は進学校で、生徒の生活はたいして学業とクラブ活動中心で、家庭もそうした生活に協力的である。この状況下での不登校生、或いはその親と多くの面接を持った。そこで非常に似通った問題の質があることに気がついて、今日の青年期の特徴ある一面をとらえるためにそれらをまとめたものである。

3、スクールカウンセリング・スーパーヴァイザーとして

筆者の勤務していた高校は教育相談機能がよく働いていて、スクールカウンセリングの進行全体をまとめる役目のコーディネーター教員を中心に一般教員からの相談ニーズも高かった。すでに校内には不登校生徒のための別室登校についての取り決めもあり、不登校生についての支援の考え方が比較的浸透している状況にあった。この別室登校については、その必要があると認められた者についてのみ、別室においての授業を受けることを認め、その時間数にもとずいて単位認定をする、という学内での慎重な協議の結果もうけられたものである。教員にとっては、通常のクラスの授業の他に時間を用意しなければならない、決して楽なものではない。一方で、生徒にとって楽な方へいってしまうのでよい方法ではない、という声もありその考え方はまだ一般的ではないかも知れない。しかし、この学校では決して楽をしようとして別室登校を選んでいた生徒はなかったようで、教室に入りたくても入れない、しかし、学業は投げ出したいくない、一人だけの教室でも学校をあきらめない、という生徒の存在がこうした仕組みを生みだした。一人だけで頑張る、というのも楽なようで、実は楽ではない。逆にしんどくても皆がやってるから、クラスにいるから、皆と一緒にいるから続いている、ということもあろう。その場から外れてしまって、一人で頑張る、というのも孤独と戦わなくてはならないし、自分をあてにするしかない、という逆の苦しさもあるだろう。家に引きこもってしまえば、より外との断絶を経験することになり、それはもっと大きな不安や苦しみを生んでいる。そういった意味では、この別室登校を活用できる生徒は、当然自分の問題を意識できて、一人でも何かに集中できるだけのエネルギーを持ち、自分で自分をある程度支えることのできる自我の強さを持っている人といえる。依存的で一人ではおれない人には不向きなやり方ではある。

今回はこの教室が有効な生徒には教員と協力しながら活用しつつ、様々な展開があったのでそれらを報告しようと思う。経過については必要に応じて学校側に伝え、学校側の理解を助け、援助の方法を探り、そのほとんどは親、家族を対象にして協力し合った経緯の報告である。不登校の場合、本人は学校に参加できなくなっているのが当然相談のために登校するというのも困難なことが多く、そうなるのが我が子の問題に悩む家族が対象となるのである。家族を支えながら、家族、多くは母親であるが、困難を持つ我が子への理解を得るとやがて、混乱した行動から我が子に今必要な態度や行動を取ることができるようになって、我が子を受け止め、子どもの発達への援助者へと変身されていく。それらを助けるのが筆者の大きな役目である。そして、それらを学校側に伝え、人一人がどのようにつまずき、どのような経過をたどるのか、或いはどのように立ち直っていくのかを見届けていただく、というような働きとなっていよう。いつ出会ったかによっては、変化が生じる前に転学してしまったり、中断してしまうこともあるがその場合でも少なくとも事例の問題状況やその見通しなどを互いに共有できるように毎回伝え、筆者としては配慮したつもりではある。こうした生徒一人ひとりの発達や問題状況を理解することが一人ひとりの教員の生徒理解、ひいては人間理解を豊かにして、日頃の教育活動に生かしていただける、と願ってのことである。

4、学校での面接

通常面接においてはその内容について守秘義務が課されており、決して外へもれることはない。しかし、スクールカウンセリングにおいては、学校内での面接、という状況は全く何も伝えなければ、わざわざ学校で面接をする意味はなく、当然そこには何らかの連携が求められている。この連携、協力のために、学校の役に立つために守秘義務は形を変えざるを得ない。学校全体の職員に向けてではなく、我々と一般教員との間に立つ教員（コーオディネーター）、あるいは直接の当事者である担任へは守秘義務を拡大して、その理解を助けるため、援助の姿勢を得るためにある程度の内容は伝えている。そうでないと抽象的で一般的な話ばかりでは要領を得ないし、自分自身のこととして体験してもらえないからである。スクールカウンセリングにおける、魅力でもあり、危険な部分でもある。つまり、我々、日常の心理臨床は本来孤独な作業であり、それらが明かされるのは、研究会だの症例検討会だのといった専門職集団での閉じられた空間だけである。めったに日常的な会話に乗せることなどあり得ない。しかし、スクールカウンセリングだけは心理職と教育職との連携、協力のもと、話し合いができるので、いわば異職種同士のすり合わせができてきているのである。筆者にとっては刺激的で、応用も必要だったりして疲れもするが？、楽しいものでもある不思議な時空間となっている。学校内での拡大された守秘義務が守られている限り、面接は安全である。一方、面接者としては、相談者の側に立ちながらも守秘義務の性質が異なっている、という複雑な状況を受け入れて実施しなければならずなお一層の慎重さや配慮が求められ、なんだか常に試されているような気もする時さえあるのである。

5、事例の紹介

(1) 来談者からの主訴、および家族等の情報から見る特徴

2年間で45件の相談者実数があり、そのうち10件に以下のような類似があった。いずれも家族機能は保たれ（両親、あるいは3世代がそろい、経済的にも安定、等）他の兄弟に問題はなく、幼少時から不登校発症までは反抗的な態度等で親を困らせることは少ない。つまり、親の取っては困難の少ない“よい子”であった人たちであり、不登校になって始めて親は困惑や苦しみを感している。こうした類似がありながら、やはり様々な経過をみせている。以下にまとめてみた。

(2) 事例

① A君（高一） 母親の来所 計10回

他高校からの相談。旧家で3世代同居の家庭、母親は専業主婦、兄と本人との二人兄弟。兄は真面目な大学生で元気に登校、友人もいる。A君はもともと友人は少なく、ゲーム好き、不登校の最初こそ寝てばかりだったが今はゲーム三昧の生活。いくら学校へ行くように言っても行かない、と母親は泣くばかり。話を進めていくうちに、母親の世話が行き届きすぎて家事の手伝い経験すらないことがわかる。家でゲーム以外にできることを考えて、家事に取り組みしてみようとなった。しかし、掃除

を言いつけても道具の使い方すらわかっていなかったし、同じところばかり繰り返しているなどの様子から、彼の生活態度の問題をようやく母親が気にするようになってきた。母親にはまだ反抗的な態度は少なく、何かと言えば頼る。書類にしても自分でしようとはしないで渡すだけ、といった様子に母親はあせりだす。外出にしても、行き方や切符の買い方など独力ではできない。これまでは自転車でどこでも自由に出かけていると思っていたので気がつかないでいた。やがて、欠課時数の問題が出てきて担任の訪問があるところから母親は、留年か転校か、さらに転校先を決めるなど、本人にまかせて口をはさまないよう努力された。なかなか決める様子がなくハラハラされたが、この決定には担任と本人とのやりとりを任せ、担任にもこのことをお願いした。やがて、本人から学校を決めて、見学、という段取りになった時も説明だけして彼に行動の主導権を渡し、母親は付き添うだけ、とした。このような過保護ともいえる母親の態度を改めるのも、母親自身子どもの世話をする生活に疑問を持つことがなかったために、スクールカウンセラー（以後SCと略記）との繰り返しの話し合いを必要とした。やがて、A君は単位制高校に転入、ようやく母子の間に隙間ができたところである。

② B君（高一） 母親のみ計4回来所

5月前後より来なくなる。母親は学校教員であり、たまたま学校行事で休みである、といった機会しか来れず会った回数は少ない。本人は小学校よりずっと成績もよく、母親が仕事で夜遅くなっても弟と留守番をしてくれたり、指示どおりに家事をやってくれたりして助かってきた。弟は兄と違ってやんちゃで我儘なところがある。兄弟の仲はよく二人して何かと遊んでいた。彼が学校に行かなくなって程なく父親までうつ病になり仕事を休みだした。この状況は母親を相当まいらせたようで泣き崩れることもあった。「結局今は二人して家にいて助け合っているみたい。夫は会社員であるがやはり激務であり家にいることは少なかった。父親が働かないで家にいる、というのはよくないと思うけど何だかよかったみたいと思うこともある。彼にとって父親が病気であるというのは残念にしても、父親と一緒に暮らしてる今はよかった、と思うから。二人して色々話してるみたい。」「私は懸命に働いてきただけだけど、この子にあまりに頼っていたのかも知れない、とこの頃になって思う。中学校の時クラブ活動でイライラしていたのか、乱暴な口をきいていた時もあったが、いつのまにか収まってしまって特に反抗的で困ることなんてなかった。弟が中学生でちょうどそんな時期なのか口をきかなかったり、反抗したり。兄とは違うみたい。この子はそれができなかったのかも知れない、と今になって思う。頼ってしまっていた。」と自ら気がつかれたように、彼のよい子としての頑張り、登校（現実に向かってエネルギーを費やす）できないくらいにすっかり疲弊してしまっていて、それに気がつかなかったことをつらいながらも認められた。やがて彼も欠課時数（進級、卒業に必要な単位を取るために必要な授業時間数）の問題から転学していった。

③ C君（高一） 母親のみ4回、母親と本人の来所一回

5月前後より行かなくなる。母親は自営業で忙しく思うようには来れなかったが、それでも何とか行って欲しいと懸命に訴えられる。小学校より成績もよく、ピアノ演奏にも優れていて校内で独演したこともある。しかし、6年生の頃から先生の指導に怒ってかピアノの練習をしなくなり、代わりにバンド演奏に夢中となる。母親は彼のしたがることは全面的に支援してきていわば自慢の息子、という具合だった。「一番上の兄は家を出て自立、めったに帰ってこない、すぐ上の兄も親離れして何を

しているのかもあまり話さない。Cは、そういえばいつもあまり友人はいなかったし、それに1型糖尿病で毎日注射を打たなければならないので、小学校の時は私が学校に伝えて配慮してもらっていた。しかし、中学校になってからは、私に言うな、と止め自分からも何も言わない。体育などは体調のおもわしくない時もあるのに。高校に入ってから軽音部でボーカルをやる、と言っていたのに、学校の軽音部のメンバーがなかなか集まらず、というのは他の部活動との掛け持ちが多いらしく集まる約束がなかなかできない。ようやく連絡が入って行ったのに日にちが違っていただけでそれ以来行かない。確かめようもしない。今は家でボーカルの練習をしていてよく歌っている。」と彼の不登高の様子に戸惑う。生育歴では特に反抗的な行動もなく、病気のためにずっと付きっきりだったように思う、と。彼に会って欲しい、と連れてこられたが、Cは母親の横に座っているだけで素知らぬ顔をしている。今日はどのようにして来たのか問うと、何をしに来たのかわからない、ただ言われたから来ただけ、何も話すことはないとも。軽音部についても母親が話し、必死な母親と素知らぬ息子という具合であった。その後来所することはなく転学していった。

④ Dさん（高一） 母親のみ3回来所

中学校の時から摂食障害であったが通院して治まり、高校へ。入学後は野球部マネージャーとして頑張る、夏休みまでは欠席はない。しかし、2学期より部活動がづらくなり、土曜、日曜の試合があると月曜日が大変、と次第に食事が食べられなくなり痩せてきて気がつくとも中学校の時みたいになっている。体重の減少が大きいので受診を勧めるが、病院へ行くと学校を休まなければならないので駄目と言ってきかない。担任を通じて、部顧問に土曜日を休みにしてもらえるように伝え、やっと受診ができる。その後、母親にこれまでになく依存的となり、母親も必死で支えようと頑張る。母親自身も華奢で共倒れしそうな雰囲気があるが、これまでは手がかからなかった分今必死で娘を支えようとしている。学校も休むようになり、医療からの指導を得て本格的に治療に取り組むためにSCとの面接は終了に。

⑤ Eさん（高2） 本人計8回 母親のみ計16回

“2年のクラスがしんどい”とふらっとやってくる。話が止まらず、家もつらい、母親が怖い、何か私がすると機嫌が悪くなったりする、姉と母とはよく気が合うみたい“と涙をにじませて話す。クラスでは友人と合わせてばかりなのはもういや、吐き気がしたり帰りたくなったりする、と孤立無援感を訴える。初回はしかし、言いたいことが言えて教室に戻る気がしてきた、と戻った。その後も時たまやってきてはクラスのことや家族のこと、自分のしたいことなどを話していた。突然彼女が自殺を図った、と聞きまもなく母親の来談があった。”今は同じ部屋で寝て、私も休職してずっと傍にいる生活です。とにかく寝る、寝るばかり、どうして“と母親は泣き崩れた。彼女がSCと会っていたのは知っていた、と気にされていたことがわかる。彼女が家庭生活をどのように感じていたのか、或いは学校生活にも疲れていたことに気付かなかったことなど、母親側の思いとともに話し合っていた。すると彼女の方から母親に色々と要求を出すようになり、帰宅が遅くなるようなアルバイトも始めた。小さい時から親の顔色をみて、間違ったことはしないように、とばかり気を使ってきた生活を覆しはじめたのである。姉はEと違ってあまり友達と群れることはなくいつもさっさと帰宅していたが、Eは時々遅くなって家族中で心配したことが何度か。アルバイトもしたいようにしてみたら、と

認めただけ、下校後アルバイト終了時刻から帰宅まで予想のつく時間に待ち受けていても帰らない。友人としゃべり続けているみたい、とあきらめ顔ではらはらしながら我慢している母親。どうしても娘のおしりを追いかけてしまいそうになる自分と戦っている母親である。Eは3年になると修学旅行は参加せず、一時はクラスがしんどくて別室登校をしていたが、授業に出ていないと試験に困るからと2学期には教室にもどった。そして卒業に必要な勉強はして、アルバイトで知り合った男性と付き合い始める。帰宅は相変わらず門限を破る毎日である。卒業後の進路について自分がいったい何をしたいのかずっと悩んでいた。母親の職業である看護師の選択も当然のように思っていたが、本当にやりたいわけではないと気づいて、やがて服装品などに関心を持ち続けていたことに気がついて、最後の最後で親をうらぎるような形でその専門学校へと進学したのである。

⑥ F君 母親の来所計34回

小学校より喘息の発作があり、入院生活も長期間あるなど、母親の発作に対する生活の管理は大変な努力を要した（ほこりを立てないための掃除や寝具の管理、換気等）。Fは生活面でコツコツが苦手で日常は親が手伝うようにしてここまで来た（宿題や提出物など）。一貫して成績はよく父親の期待は弟よりもFに集中した。特に反抗もなくこれまでは世話に手を焼くだけだった。高校も父親の期待に応じて受験したようなもの。時々いじめられるようなことはあったが、友達に囲まれていたと思う。高校入学後はクラスになじめず、いじめのようなことがあったらしい。2学期以後行こうとはせず、中学校時代の友人の家に入り浸り、帰宅も不規則となる。門限をめぐっては父親ともめることもあったが従わない。母親はFに対しては家族中を困らせる行為だとして許せない思いをぶつけるように話す。弟は兄に対して何か思うらしく何も言わずに見てみたい。学校へ行くからアルバイトさせてくれ、とかバイクが欲しいと色々登校のための条件を出してきて、母親は反対したい思いだが父親は行って欲しくてすべて飲む。結局バイク事故を起こしてしまい負傷、それ以後引きこもる。友人たちが時々やってきて、その時だけ外へでるとい生活である。入浴や着替えもしない不潔な生活に母親は困っているが、Fの場合これまでは自分が何もしなくても誰かがなんとかしてくれる、かえって何もしない方が結局うまく片付く、という生活に陥っていなかったか、とSCが伝えたことから、食事等の用意はしてもこれまでのように細々世話を焼き、声をかけることも全くやめてしまった。彼が自分で行動を起こすのを待つ、という姿勢で彼に対峙したのである。そうすると、彼は掃除のない部屋でも発作は出ないことがわかり、母親の喘息への呪縛も消える。2年次で留年と決めてもしばらく登校しただけで行かなくなる。行けばお金を出すとまで父親は譲歩したが続かず、ようやく父親はあきらめて母親にまかせるようになった。やがて退学か転校かの決定の時期がくるが彼は決められず、母親も苦しむが一貫して彼と距離をおきつつ生活には気を配っていた。弟が中学に進学、クラブに頑張るが成績は兄程はなく、一時は両親の関心が兄にばかり集中していたことを泣いて訴えたこともあった。弟の真面目さを励ましつつ弟のクラブ生活を母親は懸命に支える。退学という道をようやく彼は決めたものの手続きがなかなか進まない。担任も家庭訪問をしてくれたり、退学後の相談にのったりした。2学期を終えるころ、漸く彼が学校へ書類を届けて退学となる。この頃には母親の趣味である映画の試写会めぐりに彼も行きたいと言い出し、二人で出掛ける、ということができるようになってきた。母親と行動を共にする時間もでき、会話がはじまってきた。SCからは学校とも相談のうえ、

引き込みの支援施設を紹介する、などして終えた。

⑦ G君（高2） 母親のみ計33回来所

一年次はクラブ活動ともに登校していたが2年次でクラスが変わるとクラスの不安を口にしていた。2学期からはほとんど行けなくなり、クラス生からのメールにも、アドレスを知られていたことに怯える。学校方向にすら行けなくなっているため、両親の車で学校を見に行く、学校の前を通る、学校の門を触る、学校の中に入る、といったような細かい段階を作って慣れる作業を2カ月くらいして校内に入れるようになってから別室登校にもチャレンジした。しかし、担任が熱心にかかわろうとすればするほど苦痛になってきて中断、定期試験を受けた後全く行けなくなる。3年には一応進級が認められ、クラス生にも配慮があった。成育歴では小学生頃はやんちゃで注意を受けることがあったので厳しく言い聞かせると大人しくなり、中学校では何も指摘を受けることはなかった。3人兄弟の末っ子で年も離れていて、まるで大人4人に囲まれて育ったよう。父親も母親も教師であるが、母親は単位制高校勤務であったので時間に余裕があり、毎週面接。両親ともに何かと学校に連絡も多く、過保護だと学校は印象を持つ。父親は以前より、うつ病罹患、Gも同じ病院に通う。母親の面接では母親の過剰な不安や世話が浮き彫りとなり、それらは絶えず家族間での争いを招いていて、彼は絶えずそれを見ていた。特に母親と姉との争い、母親と父親との争いはひどかったと思う、と。今は兄や姉は自分たちから距離をおいて自立している。夫の病気は私との争いが関係しているのでは思うこともある。夫は仕事は熱心にするけど家では何一つしない、私が困っていても、と夫への不満は続いた。一方彼に対しては母親として何をしてやればよいのか、といった質問が続いてまるで自分のことのように考え、行動してしまう様子が伝わってくる。これを取り上げて話し合ううちに、Gが自分で考え、行動する前に何でも先に教えて、叱ってきたことに気づき、彼もそれにすっかり頼っている様子にも気がついた。それからはできるだけ口を挟まず、彼が聞いてきたことだけは応えるけれど、それ以外は見てみぬふりをする、というこれまでにない努力を母親は続けた。すると明日は行くから、といった母親を安心させるような空約束も止めて、のびのびとした態度になり、好きなプラモデルなどに熱中するようになり、睡眠も良好になり、投薬量も減少する。夫との争いも少なくなっていて、気が付くと夫の方の投薬量も減少、私のせいだったのかしら、と母親は苦笑。家庭生活では改善が見られてきたが、彼はもともと友人関係は乏しく、唯一同じ中学校から入学した友人とのメール交換しなくクラスに馴染みようがない。3年のクラスもクラブ生を中心に配慮があったもののかえって負担となったらしく数日の登校だけで終わった。彼のクラブ活動はもっぱら顧問の指示に従うのに懸命で、2年生になっても1年生よりもこまめに道具の出し入れや片付けに回り、同年生との交友は確かなものではなかった様子である。それでも担任のはからいや母親の希望、本人の希望で修学旅行には参加。母親はその後の旅行の写真展を見て回って、他の生徒のはしゃぎぶりと比べてあまりにも暗く、硬い表情に驚いてこれが登校につながるものではないことによりやく気がつく。結局は彼自身がこの高校を卒業することをあきらめて転校していった。色々見て回って単位制の高校に転学。

⑧ H君（高2） 母親が計5回来所

中学校までは友人も多く勉強も頑張っていたのに、高校入学後しばらくすると朝起きず必死で行かせて何とか2年に進級させてもらった。一年の時はどうして行こうとしないのか毎朝母親ともめ続け

る。彼は特に何もない、というだけで朝起きようとはしないのでつい叱っては行かせていた。どうしても駄目な時は休んでしまい、担任に心配をかけどうしだった。バスケットが好きで入学後すぐに入部したものの、楽しむよりも勝つクラブだったので次第にくたびれてきて2学期には勉強に頑張るからと退部。バスケは好きなのに迷惑をかけるからと考えていたらしい。2年生ではさらに起きずに担任からははっぱをかけてもらい、家では叱る、という毎日でとうとう2学期後半からは全く行こうとしなくなった。母親は疲労困憊した状態で現れた。兄もこの出身でラグビーにかけた3年間だった。兄は家では何でも話してくれて手に取るように兄の場合はわかったのに比べ、彼は学校のこともクラブのことも何も言わないのでよくわからないところがある。しかし、家では兄よりもやさしく、手伝いをしてはよく気がつくし、同居の祖父母にもやさしくよく褒められる。学校でも皆と仲良くやっていて決して孤立しているのではない、と担任は見ている、母親もそれとなく学内の様子を見ていて無理やり登校させても楽しそうだと思っていた。頑張らせたい、との母親の思いは強いが、一方でこれ以上彼との朝の格闘を続けるのも限界にきている、と訴える。次第に欠課時数が問題となってきているのに、彼は確かめようとはしないで「聞きたくない」と現実と直面するのを避け続けた。実際にオーバーとなって母親から聞いてがっかりする、という受身的な態度があり、恐らくクラス内でも彼は決して主張もしないし、受身的にやさしいのでクラス生は彼がいても困らなかつた、と考えられ、逆にいなくても困らないのである。来ない彼にクラス生からは特に何も働きかけはないが、中学校時代の友人関係は今も続いていて彼らと度々マージャンを楽しんでいる。マージャンをしている彼は生き生きとしているといい、家が一番よさそうな彼である。やがて母親は苦痛の中であきらめざるを得ず、転学させた。

⑨ I君(高一) 母親のみ計5回

2学期半ばより行き渋る。遅刻も増えてきていた。休みが続いたので担任が家庭訪問をして両親と本人を交えて話し合い、翌日より登校する、ということになった。しかし、腹痛だと訴えて行かないし、部活動も2学期にはかつてに辞めていたこともわかる。高価な道具など買ったのに、と母親は涙にくれ、彼に憤っている。せっかく入ったこの高校で頑張りたい、という訴えが強く泣くばかりの母親である。彼は、しかし、働く母親に代わって弟の面倒を見続けていた。夜間働いていたので、兄弟二人で夜の食事をしてしたが、準備は母親がしていたとはいえ、食べるように世話をしたのは彼である。さらに宿題や入浴の面倒をみていてこうした家族としての彼の働きは母親の眼中にはあまりない。弟は今、口答えも激しく、要求も強くこれらにも困っているが、一方彼の存在感のなさになかなか母親は気づかない。自分のために泣いてばかりであったが、しだいに彼の無言の働きに目を向けられるようになり、彼の心細さに思いを見せるようになった。しかし、欠課時数の問題が表面化してきて、両親ともあわてて転校の手続きを取った。

⑩ Jさん(高一) 両親との面接1回、母親のみ計10回

3人兄弟の長女として、下の模範となるべく厳しく育てられる。一貫して成績もよく中学校時代は塾の送迎で夢中だった。やっと受験が終わり、春休みは中学校時代の友人とよく遊びまわっていた。入学後はしばらく順調に登校していたが、しだいに学校の文句を並べ始め馴染まないようだった。それでも頑張っていた学校だから、と励ましていたのに夜遅くに帰るようになってきた。翌朝が起き

られずに遅刻したり、とうとう休むこともあった。一学期終える頃にはクラス生と文化祭をめぐってもめ、夏休みはその練習にも参加せず、中学校時代の友人達との付き合いで時間もルーズとなる。高校では友人もできないまま2学期に入って間もなく授業時間中に不安発作（吐き気や頭痛）を起こしたり、リストカット事件を起こす。両親そろってSCのもとに来られたが、これまでは何も言うことのない自慢の娘がどうしてこのようになったのかと驚いておられるばかり。これまでは反抗一つなく、弟や妹の模範となれというときちんとしていたのに今は全く耳を貸さない。色々症状が出てきて、医者からは登校を強制すると言われた。私はこれまでずっと我慢してきた、と娘に言われ驚いている。反抗期を経験したことのない両親にとってこれは晴天の霹靂であったに違いなく、彼女が自分を語りだしたことを説明し、登校を無理強いするだけでは解決しないことを伝えた。すると今度は彼女の言いなりになってしまっただけで生活は乱れ始め、家庭教師できていた男性との付き合いも進展、学校生活どころではなく、欠課時数の問題が出てきて、留年が決まる。しかし、これで親の方もかえって落ち着いてきて、彼女の症状も消失。

6 考察

(1) 事例の検討

① A君、G君

母親の過保護といってよいような世話の仕方とそれに頼る子ども、という2者関係のまま、友達といった3者関係にまで開かれてはいない状態。学校でも大人（担任）の指示に忠実で、一方クラス仲間とは交友に乏しく明らかな情緒発達遅滞にある。発達障害も疑われるがこれまでに学校という集団生活の中で大きな逸脱や問題行動はあがっていないことを考慮すれば、疑わしいけれどもどうかという所であろうか。各々単位制高校への転学であったが、課題は友人関係の成立である。親側の課題として、失敗や無駄をする自由を与えられるくらいの距離をつくることであった。

② B君、H君、I君

忙しい母親を気遣い、手伝い、頑張るがそれに気づかない母親。やがて疲弊して引きこもるが高校まで破綻しないでやってこれたのは能力に支えられてのことであろう。しかし、他の兄弟のように我儘を言ったり、反抗したり、といった子どもとしての自由な行動はできないまま、大人の価値観に縛られやすい、いわば超自我優位であり、子ども同士の目線より大人の目線が気になってしまう子どもたちである。よい子の息切れと言われる典型例、といってよい。

③ C君、Dさん

能力を発揮して認められるように頑張ろうとする。それに成功している時はむしろ優れた子どもとして賞賛されようが失敗すると立ち直れない。出来る子がいい子、といったとらわれがある。できることにこだわってしまい、外からの評価で自分を認めさせようとするような無理が常に働きがち。自分なりの満足や楽しみに価値を見出せず、いわばねじれた自己評価にこだわるあまりの情緒障害である。

④ Eさん、F君

家族病理にからめとられたように、いい子でなくては居場所がないと感じられている。母親の機嫌を損ねないように、とか父親の溺愛と期待に応えなければ、といった束縛からのがれようとするかのように行動的になって家族を困らせている。いわば遅れてやってきた反抗期のように大暴れしているかのようで、しかし、これだけのエネルギーを発揮できる力を持っていた、とも言えて、交友関係も成立しているので、ストップしていた発達現象は前進しようとしている。

⑤ Jさん

理想的な家庭生活を営んでいると思っていた家族はあっけなく、彼女の激しい行動によって崩された。自慢の子どもを持つことを疑わなかった親と自慢の子どもになるためにどのような思いをしてきたのか、を訴える子どもの対立ではあった。しかし、その理想はもろく、彼女の暴走を止められず、むしろ子どもに迎合しているような有様で、理想の姿は何なのか混迷するばかりである。彼女としては、理想を壊すべくどんどん激しい行動を起こしてしまっていて、まさに反動形成そのものである。

(2) 発達現象を考える

これまでの代表的な研究者である、高木⁽¹⁾、平井⁽²⁾、山中⁽³⁾等の研究例に近いものは②のタイプである。忙しい母親を気遣って母親を助けているが、母親の方は忙しすぎてか唯子どもに頼ってしまっていて、それに気づかない。子どもに対して褒めたり、感謝やねぎらいを示していたなら、母親とのこのころの一体感が生じて、助けている自分に自信を持ちむしろ自我を強化したかも知れない。そうはならなくて、気付かない母親に対して、怒るでもなく静かにひきこもってしまうのである。怒りに向ける程の関係が育っていなかった、と言える現象であって母子関係の希薄さがうかがわれる。愛着理論⁽⁴⁾からいえば、早期発達段階での情緒にすでに問題があったともいえ、依存対象に安心して依存できないまま、代わりに引き受けていい子として認めてもらうことで愛着を確かなものにしようとする無理が最初からあったのである。④のタイプの子どもたちもいい子として親に認めてもらうことで愛着関係を保とうとしている。その経験は親以外の他の人間関係も同様に保とうとする努力へ向けられ、クラス内でもよい関係であろうと、嫌われたくないので人に合わせる、といった無理をさらに重ねていく。これはこうした子供たちの共通した現象である。こうした無理のある適応については特にEさんが面接場面に登場してその苦しさを明確に口にしてしている。自分の思いや考え、行動よりも常に一緒にいる人たちの言動に合わせてしまい、本当は望んでいなかったり、苦しかったりするのにそれらは態度に表すことなく表面は何事もなく一緒にいるのである。むろん、これもやがて疲労や疲弊を招いてしまい、学校からも撤退してしまう。ただ、Eさんも、F君、も学校からは撤退しても、親に対してはいい子を止めて反旗を翻し、親を困らせていく。この場合は親との愛着関係はかなり発達していたから、遅れてでも反抗的な行動がとれて、親を試し、親を自分のたたき台として利用しようとしたのである。親に対しての、自分を見捨てたりはしないだろうという安心感が基本的に育っていたから、親とのバトルができたのである。ノーと言えなかった危うい、表面的な人間関係もノーと言える関係に持ちこたえられる可能性が産まれてきている。Eさんは後に自分のクラスに戻ることができた。

筆者はこうした②のタイプの親の場合は子ども実際に目を向けて、子どものいい子としての力に頼

るだけではなくそれに気がつくこと、親を助ける行動の一方で子どもが子どもとして生きてこれなかった部分にも気がついて、いい子である前に要求や衝動すらも持っている一人の子どもとして認めていく作業を、④のタイプの場合は子どもからの反乱の意味を理解して、引き受けていけるだけの支持的なサポートを、其々続けてきたのである。

⑥のタイプも反旗をひるがえすわけだが、親の理想（親の言うことをよく聞き、勉強にも頑張る）の家庭は子どもが大きくなって行動力を持ったとたんに破れてしまった。周りからも褒められ続けてきた両親にとって、子どもの反乱は信じられないものであったが、その維持はもろく、子どもの危ない行動にも歯止めを入れない、など反対に子どもに迎合するかのようすべてを許していく。

反乱には、親とは違う自分なりの思いや考えを持ちたくて、一旦は身につけてきたものを脱ぎ捨てようとの意味があるが、そこには家族としてのルールを一緒に守ったり（門限や交友関係、危険行為等）、破壊的な行動は反社会的行動として制限を入れたり行動規範はどんな場合も必要である。それらが今の家庭にはどこか明確ではなく、争わない方を選んでしまう、という傾向がありこの家庭もそうであった。筆者に危険じゃないか、と言われて始めて考えて、子どもの行動の後を追いかけるようになって、事態は進んでしまうといったことが何度かあった。いい子を求めたように親もいい親になってしまって、何も言わない、という状況に陥ってしまった。登校については、留年が決まってからは互いの緊張関係は解消してしまい、Jさんの登校への不安や葛藤は一旦消失した。しかし、新学期が始まってしまうと再燃の恐れがないだろうか危ぶまれる。

③のタイプは摂食障害にみられる強迫とねじれが見られる。例えば、どんなに疲れていても登校する、一日だけの休みとか遅刻や早引けといった柔軟な行動はあり得ない、頑張る自分だけが頼りになるとばかり、絶対に手を緩めない、などがある。しかし、そこには大変な無理があるので常に何かを頑張っては挫折、次こそと又同じような失敗を繰り返す。C君、Dさんはそうした反復を経過しているのにそれらを認めることはできないし、親も頑張る部分に目を奪われがちで、こんなに頑張っているのに可哀そう、という思いを抱いておられた。

これらはやはり、発達早期の愛着形成にまで遡ることができよう。不安定だったり、忙しすぎたり、とかで自分への関心も得にくいと感じられていると、喜ぶ行為をして親の心を得ようとするかのように、何らかの能力の発揮で頑張る、そうして安心したい、という愛着の質の問題が根柢にあると考えられる。こうした場合、何か目に見えるもので頑張る、ということしかできないのに、それを止めて一旦休息を、と提案したところで受け入れられることはまずない。一旦止める、ということはこれまでの生き方の全否定につながるような不安を大きくさせたり、時には自分への非難（どうせできないのだから・・・等）としか受け止められなかったりするようである。この場合、ほとんどは長期の根気強い治療的かかわりが求められ、学校内の取り組みでは解決は困難である。

①のタイプは発達的な問題が最も大きく、社会参加（登校）に至るには相当の時間を要すると思われる。親側の忍耐強い、長期にわたる支えが望まれるが、これに取り組む親をさらに支えなければ到底もちこたえられないだろう。A君、G君ともに今は親の配慮（子どもとの距離を持つ、子どものことは子ども自身に取り組ませる、先に教えてしまわない、失敗、間違いをさせよう、等）がある中で、ようやく家庭内での自由な行動が現われてきたところである。やがて、外での行動も自由に自分で判断しながら

ら生活が成立するようにならなければ、社会参加はあり得ない。この先何年かかるかも知れない道のりを、傍にいながら邪魔をしない関係であり続けるには、やはり親だけではできないし、継続的な親支援、子ども支援が必要である。学校に所属している間は、まだ何かと支援の機会が与えられるかも知れないが、学校を終えた後は心もとない状況である。いや、学校に在籍していても援助を利用できていない場合、誰も知られずに事件となってこうした子どもの存在が明らかとなってしまふ事象すらある。閉じられた家族関係だけの中で生き続けていると、やがて疲労や緊張の高まりの中で暴発が生じる。彼らは社会関係が取れない（学校生活や交友関係など）、という一点から見れば今日注目されるようになった、発達障害も疑われる事態である。ただA君、G君は学校生活の中で、発達障害を持つ人たちに特有なパニックや問題行動はあっても少なく、どちらかといえば、目立たず、いい子として見なされていた。だから、よけいに高校生になっているのに、友達経験に乏しく、むしろ恐れているだけで葛藤にもならない状況に陥っているといえようか。昨今新聞を賑わせることのある青少年事件では、必ずといってよい程、それまではいい子だった、との報道が続くのである。そして突然の変身のように言われたりしているがそうではない。A君やG君のように引きこもった生活が何年にもわたり何の支援やかかわりもなければ、やがて社会から全く切り離されたような生活となるし、支えるはずの親も関心を払い続けることが難しくなるかもしれない。そうした孤立無援感は被害感を招きやすく、自分以外の周りはすべて悪いものに見えてくると、見えない何かに向かって行動は暴走する。

一貫した長い支援を必要とするのはこの人たちである。親には長期の支援を受け続けるように伝えてあるが、社会資源の問題もあり心もとない思いではある。

5、まとめ

「いい子」をキーワードにして10例を発達現象からみて5のパターンに分類して考察をおこなった。発達水準から見れば様々であったが、友人関係、家族関係ともにいい人として気遣い、衝突は避ける様子があつた。子どもの発達を促進させるべく親自身の支援者としての力を育む取組みについて報告を行った。

引用文献及び注釈

- (1) 高木隆郎著 学校恐怖症の典型像(1) 児童精神医学とその近接領域 6:146 1965
子どもの劣等感または完全欲に起因した学校場面から家庭場面への避難であるとする。
- (2) 平井信義著 登校拒否の概念 日本文化科学社 1975
子どもの主体性の発達の遅れとして、親の過保護や過干渉、支配の養育態度を起因とする。
- (3) 山中康裕著 思春期内閉Juvenile Seclusion—治療実践よりみた内閉神経症(いわゆる学校恐怖症)の精神病理 中井久夫他編:思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社 1978

優等生の息切れ型、甘やかされ型、があげられており、核家族や知的家族に見られる「よい子」としてしつけられた子どもの破綻や過保護に育てられた子どもの社会的逃避があげられている。

- (4) J. ボウルビィ著 母子関係の理論 I 愛着行動 黒田実郎他訳 岩崎学術出版社 1976
乳児が特定の対象に対して抱く特別な感情、情緒を指す。たいていは母親が愛着の対象となるが、乳児は最初の愛と信頼の対象として、親密な相互作用を営んでいる母親を選択する。この母親との関係がその後々の子どもの人格形成や人間関係の在り方に大きな影響があるとする理論。

参考文献

- (1) 国松清子 登校拒否症論の再検討—昨今の臨床事例をとおして— 奈良女子大学大学院文学研究科修士論文 1983
(2) 川上範夫著 少年補導NO.279 「葛藤なき内閉型」としての登校拒否症 1979
(3) 佐治守夫・神野保信編 現在のエスプリNO.139— 5号 登校拒否 1979
(4) 若林慎一郎著 登校拒否症 医歯薬出版 1980
(5) 斎藤久美子他著 登校拒否症の収容治療—類型的検討 児童精神医学とその近接領域 8 : 365 1967
(6) 三好邦夫 失速するよい子たち 主婦の友社 1996
(7) 山中康裕著 少年期のこころ—精神療法を通してみた影— 中公新書 1978

